



西天王剃髮異錄

後編

13  
974  
10



明 13  
974  
卷 10

源家 四天王剽盜異録卷之十  
勲績

東都 飯台 曲亭主人著  
門人 魁菴 癡叟 校

三林橋通  
山本町南  
本助

第十九綴

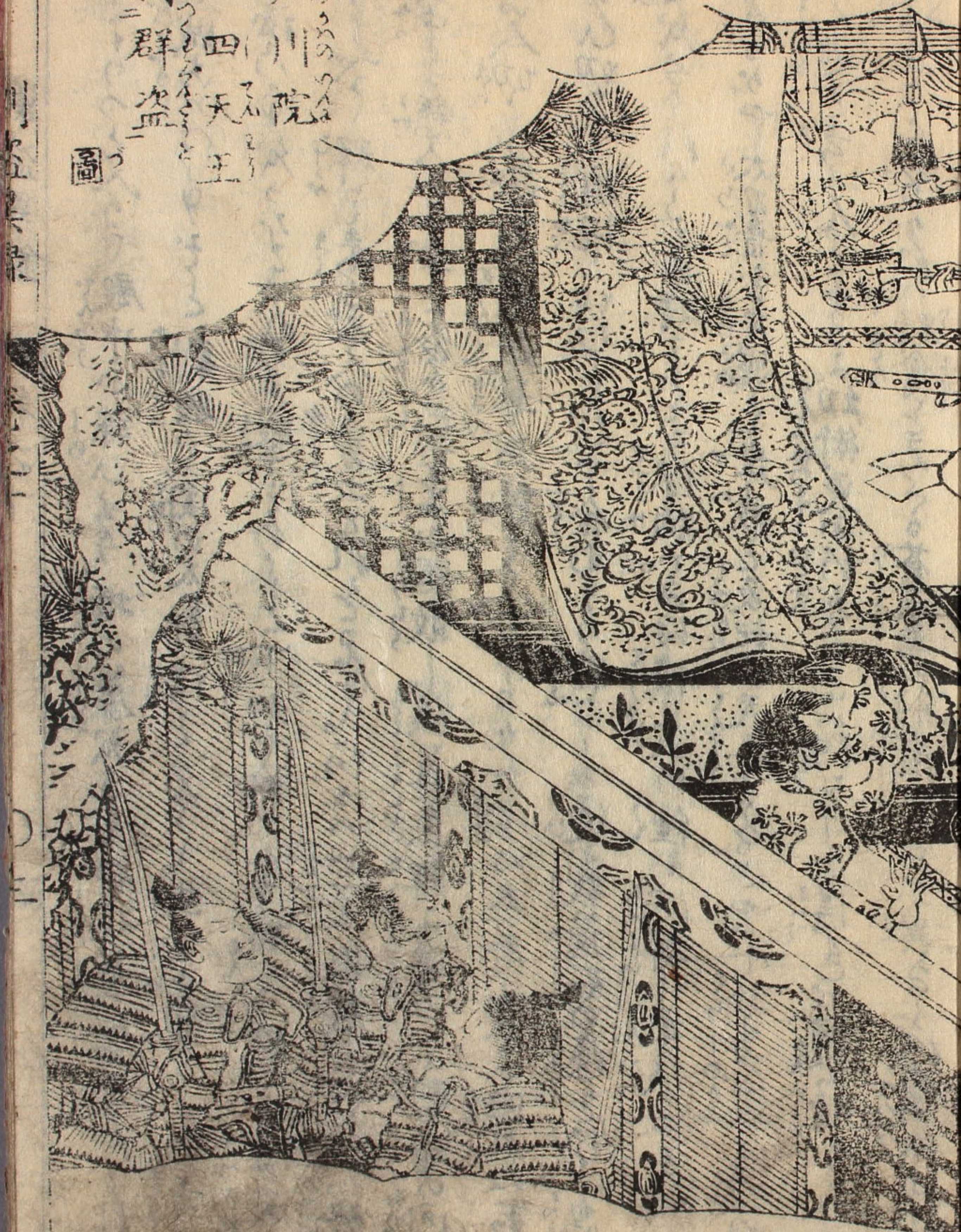
保輔黨を平く堀河院小乱入を談  
附 四天王勇敢衆賊を殲する事

保輔黨を平く堀河院小乱入を談  
附 四天王勇敢衆賊を殲する事  
中納言頭光卿の御館を堀河院小乱入する折も黄門の當坐の御會少  
参内ありたるに... 防犯戦者もあがり... 程小青侍の御臺公遠く扶  
掖進を後門より逃去れ... 衆賊抜入... 重器財宝をとり集り己不  
押去らんとするに保輔志... 押さぬ... 偷して一生を... 命を...

川盛集録



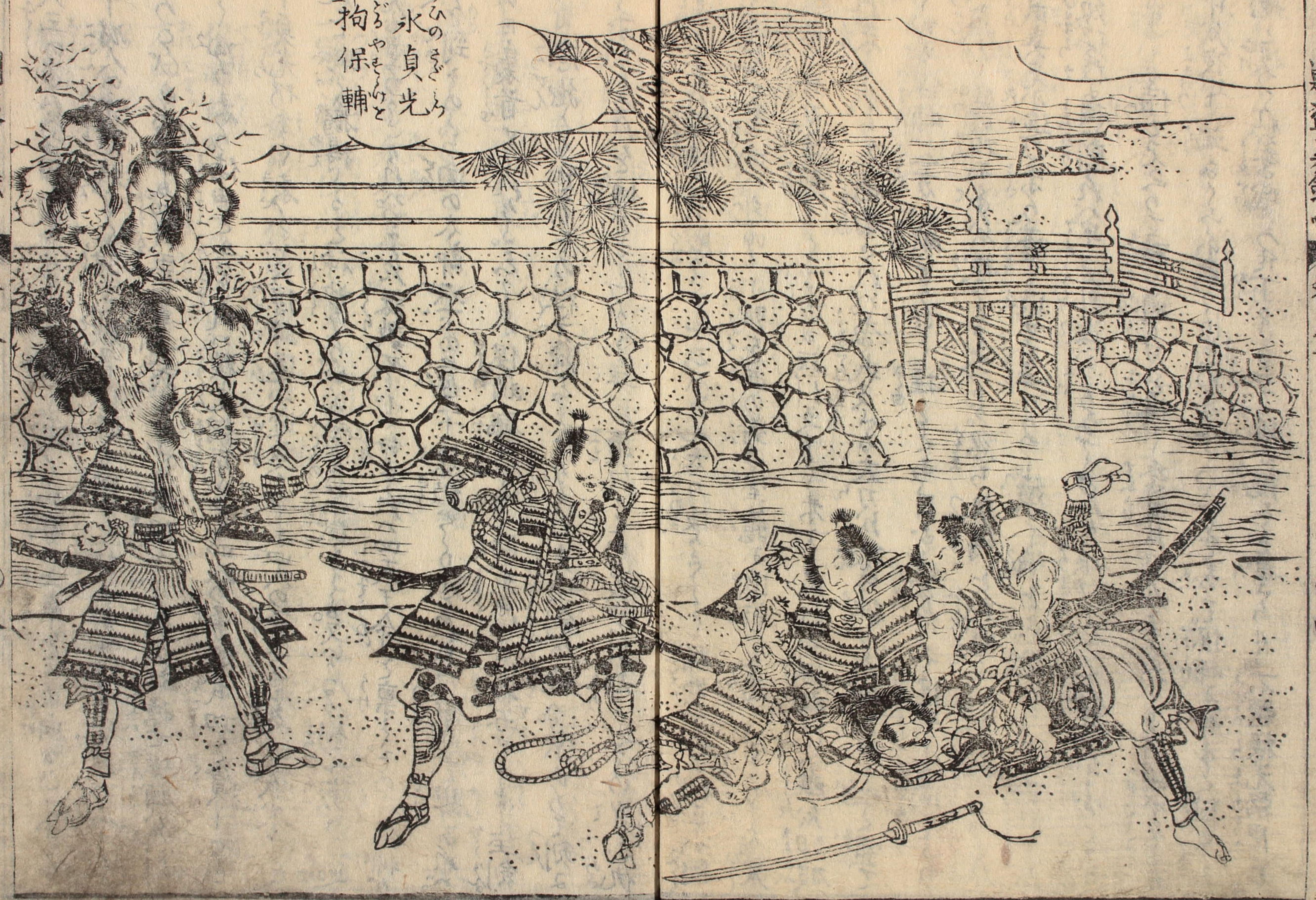
堀川院  
四天王  
刺群盜  
圖



堀川院  
四天王  
刺群盜  
圖



碓氷貞光の生保輔の圖



四天王のゆゑにほろりしを食す。追く加勢の士卒とて一向のひらきや  
 二十餘人の兇賊残を討ち、賊首保捕も既生捕せぬとせえられれば、ふりく  
 ころごびめおちも。四天王の勇士討りける首級を下郎小扛擔せ保捕を引  
 きてゆりまら。備由を告げれば、頼光朝臣あやう四人の勇敢武功を賞し、ひ  
 り貞光おろく素もとの保捕遂に逃去りし。四人の勇士自多と横合令て  
 これを斬り搦得ること神妙なり。かゝる瘴者禁獄せしむ。又いづる樹を以て  
 亡人も量りごとくれば、そぞろ誅戮せしむ。命されし四天王命を慕く、その  
 首を到りしち國の太郎以下の首二十餘級ありし。これに使殿小判通  
 次の日梟首せられり。まゝも保捕臘九なり。時致忠より授与し、宝劍  
 ころの目忽施せしむ。その往方なるといふ。夫宝劍の徳へん小ありて、劍よ  
 めまかりしを佩く。いづる身は護れしとあせられ、却てそのあふ仇

まると。和漢の例多し。抑保捕刑せしむ。とん四十八歳村上冷泉圓融  
 花山四代聖主の御宇と歴く。賊なること二十年。とて追討の使を蒙る  
 と十五度禁獄三度不及ひぬと。まの妖術をりて脱またり。まの天の  
 網の洩るることあせり。勢やうやうと小竭れ。終小四天王の為誅せられ  
 実小一條帝の永延二年六月十八日のこととせえし。  
 一説小袴垂保捕が支黨の酒顛茨木棟牛といふ。二人の兇賊ありたり  
 おのく妖術を保捕小習ひ得て、種小形を變じ、花形自在なす。ぬ  
 保捕誅せしむ。の後酒顛へ丹後の千丈嶽を棲く。茨木の丹波の  
 大江山小寨を構へ、棟牛ハ近江の膳吹山小楯籠共、丹足の勢ありて。  
 常小美女が劫し、賊室を掠る。時小正暦元年保捕誅たり。源頼光朝臣  
 勅命を奉り、藤原保昌より小四天王を將く悉くこれを誅し畢る。とりし。

第二十級

説石尼義小仗、保輔が首を匿と談

附 四天王勸賞源家葉昌の事

保輔鼻首せられ、次の日、年老る一個の女僧、鼻磔のやうにあり、保輔が首  
 を見え、声ありて、愛れり。終日、どろりかき、去るるのり、獄後の音、卒  
 くれ、瓜、怪、遂、ふこの女僧を、頼光朝臣の御船、不持、りし。徳由を、新、なり  
 頼光、まのり、ち、願、ふ、出、く、彼女僧、な、る、出、り。い、ん、ぐ、う、宣、く、は、は、保、輔、か  
 由、縁、あ、り、の、歎、何、の、故、に、連、累、れ、外、に、瓜、首、を、終、日、そ、の、わ、く、ふ、あ、り、く、帝、哭  
 る、る、と、宣、へ、彼女僧、言、し、と、申、す。尼、に、保、輔、が、養、母、極、ま、り、の、お、て、  
 祝、髪、の、後、説、石、と、号、し、し、縁、故、を、告、す、と、い、ひ、く。夫、六、部、二、女、尼、深、堂、画、仏  
 尼、乃、事、小、至、る、ま、く、保、輔、が、身、の、頼、米、を、詳、ふ、し、れ、れ、頼、光、つ、く、う、た、ま、く、沙、が  
 今、の、女、僧、瓜、首、に、り、家、愛、の、女、兒、と、保、輔、が、教、え、れ、教、え、ら、し、と、い、ふ、ま、く、彼、女、僧、が  
 仇、お、く、つ、ゆ、む、り、の、恩、あ、り、思、が、れ、人、の、死、を、哀、し、く、い、う、る、罪、が、招、へ、ん、と、申、す  
 へ、思、ひ、あ、る、の、小、あ、り、ま、く、宣、へ、説、石、尼、と、い、ふ、と、申、す。尼、に、敢、て、保、輔、が  
 哀、く、哭、く、と、い、つ、も、只、積、悪、餘、殃、あ、り、く、因果、觀、面、乃、理、脱、ま、く、ま、る、ゆ、に、感、ん、で  
 哭、か、け、り、ま、り、ま、く、尼、が、夫、六、部、二、人、瓜、教、も、の、隱、悪、あ、る、ま、る、その、身、も、又、人、瓜、教、  
 され、その、殊、殊、女、兒、不、係、り、と、これ、も、又、横、死、せ、り、只、尼、の、可、も、ま、く、不、可、も、な、く、愁、ふ  
 世、お、こ、り、終、れ、れ、今、日、不、至、る、の、神、仏、尼、を、り、事、の、本、末、瓜、悟、せ、當、来、衆、生  
 の、滅、す、の、ふ、と、か、り、は、い、づ、不、悲、し、く、さ、る、人、之、賢、人、に、さ、る、り、あ、も、愚、る、尼、が、歎、れ  
 瓜、精、の、今、と、悼、る、色、ま、く、量、多、れ、頼、光、朝、臣、御、座、の、傍、に、候、し、る、自、光、瓜、又  
 之、り、て、説、石、尼、不、亦、く、宣、く、汝、只、積、悪、餘、殃、の、道、理、を、説、と、い、ふ、積、善、も、又、ま、り、汝  
 將、を、あり、あ、り、ま、る、む、じ、は、汝、夫、六、部、二、を、射、る、の、予、が、愛、臣、碓、氷、荒、を、詔、自、光  
 ち、り、自、光、初、弱、の、時、父、橋、平、を、六、部、二、教、え、れ、仇、を、あ、り、ま、り、十、六、年、天、の、

仇、お、く、つ、ゆ、む、り、の、恩、あ、り、思、が、れ、人、の、死、を、哀、し、く、い、う、る、罪、が、招、へ、ん、と、申、す  
 へ、思、ひ、あ、る、の、小、あ、り、ま、く、宣、へ、説、石、尼、と、い、ふ、と、申、す。尼、に、敢、て、保、輔、が  
 哀、く、哭、く、と、い、つ、も、只、積、悪、餘、殃、あ、り、く、因果、觀、面、乃、理、脱、ま、く、ま、る、ゆ、に、感、ん、で  
 哭、か、け、り、ま、り、ま、く、尼、が、夫、六、部、二、人、瓜、教、も、の、隱、悪、あ、る、ま、る、その、身、も、又、人、瓜、教、  
 され、その、殊、殊、女、兒、不、係、り、と、これ、も、又、横、死、せ、り、只、尼、の、可、も、ま、く、不、可、も、な、く、愁、ふ  
 世、お、こ、り、終、れ、れ、今、日、不、至、る、の、神、仏、尼、を、り、事、の、本、末、瓜、悟、せ、當、来、衆、生  
 の、滅、す、の、ふ、と、か、り、は、い、づ、不、悲、し、く、さ、る、人、之、賢、人、に、さ、る、り、あ、も、愚、る、尼、が、歎、れ  
 瓜、精、の、今、と、悼、る、色、ま、く、量、多、れ、頼、光、朝、臣、御、座、の、傍、に、候、し、る、自、光、瓜、又  
 之、り、て、説、石、尼、不、亦、く、宣、く、汝、只、積、悪、餘、殃、の、道、理、を、説、と、い、ふ、積、善、も、又、ま、り、汝  
 將、を、あり、あ、り、ま、る、む、じ、は、汝、夫、六、部、二、を、射、る、の、予、が、愛、臣、碓、氷、荒、を、詔、自、光  
 ち、り、自、光、初、弱、の、時、父、橋、平、を、六、部、二、教、え、れ、仇、を、あ、り、ま、り、十、六、年、天、の、



至孝瓜憐と晴小仇と報せむり善悪とて報あるも。これをりてあはれをいと  
 と宣ふハ説石尼談話とて此と奉。まじり貞光公うち瞻然然うて居りたり。  
 時小光又宣ふりて汝が訪るところも故あるか守りし親ひあはれをせしと  
 宣ふと見説石尼くどりり竟介と。尼外小光にるは保捕首を賜ふ女見  
 が墓小合せ葬るる瓜臆く入り。しるる頼光朝臣うち笑ひまひ深雲ハ保捕小  
 教されん。宛魂泉下小宿死に迷入るをさふべし。ある瓜今合葬せんといふハ  
 いふも理ぞと怪しむ。説石尼法夜の袖を死合せ夫貞女ハ両夫小見えむと  
 いふ。従ひ保捕首をさし見。徳不送ひく深雲と教とも。深雲ハ掌りて瓜  
 あととあはれむる由ふ瓜教とて節と全り。ゆりぬ且保捕刑小妻を娶り  
 り瓜あはれむる保捕首は貞探の妻なり。保捕をりて仇とせむ。  
 深雲が死後むとさふりて身もかく探もせむ。これ瓜合せ葬。夫女の死

祀りし瓜ハ深雲ハゆのうら貞女の道小稱ひく。その死も又悲しむ足る。故小  
 保捕首瓜賜ふんを預ひゆるとも。こふ終り頼光朝臣とまりて感ふあり  
 く。汝頗賢なり。何人を師く學とる。眼のへ近曾画伝尼ハ道ハゆられと  
 言ふ。いふもその教ひ小ねとべられも。彼ハ賊の首瓜されん。私ハ聽く。汝五戒のうら  
 一戒を破せ。直なるその中小あんと宣ふと見。説石尼くゆりその意瓜曉得。  
 その夜保捕首瓜偷し果す。守人もまうりる。瓜の右部が首とく。これ瓜  
 信州小携ゆれ保捕首を深雲が墓小合せ葬る。瓜の右部が首と彼が故郷の  
 地小埋むといふ。今まは御嶽の西街道の田の畝小園の右部が首塚あり岐山路  
 瓜のうら人のひ小るるところ。有る後説石尼ハさむび都小登り。画傳尼ハゆへ  
 く。まじりくる人の善提をゆひくる。その次の年乃秋八月画伝尼ハ朝説石  
 尼小書く。明日ハ彼岸の時正く善道大師の觀經記も念ふ。西方

和泉式部  
進歌於性  
空上人圖



和泉式部

進歌於性

空上人圖

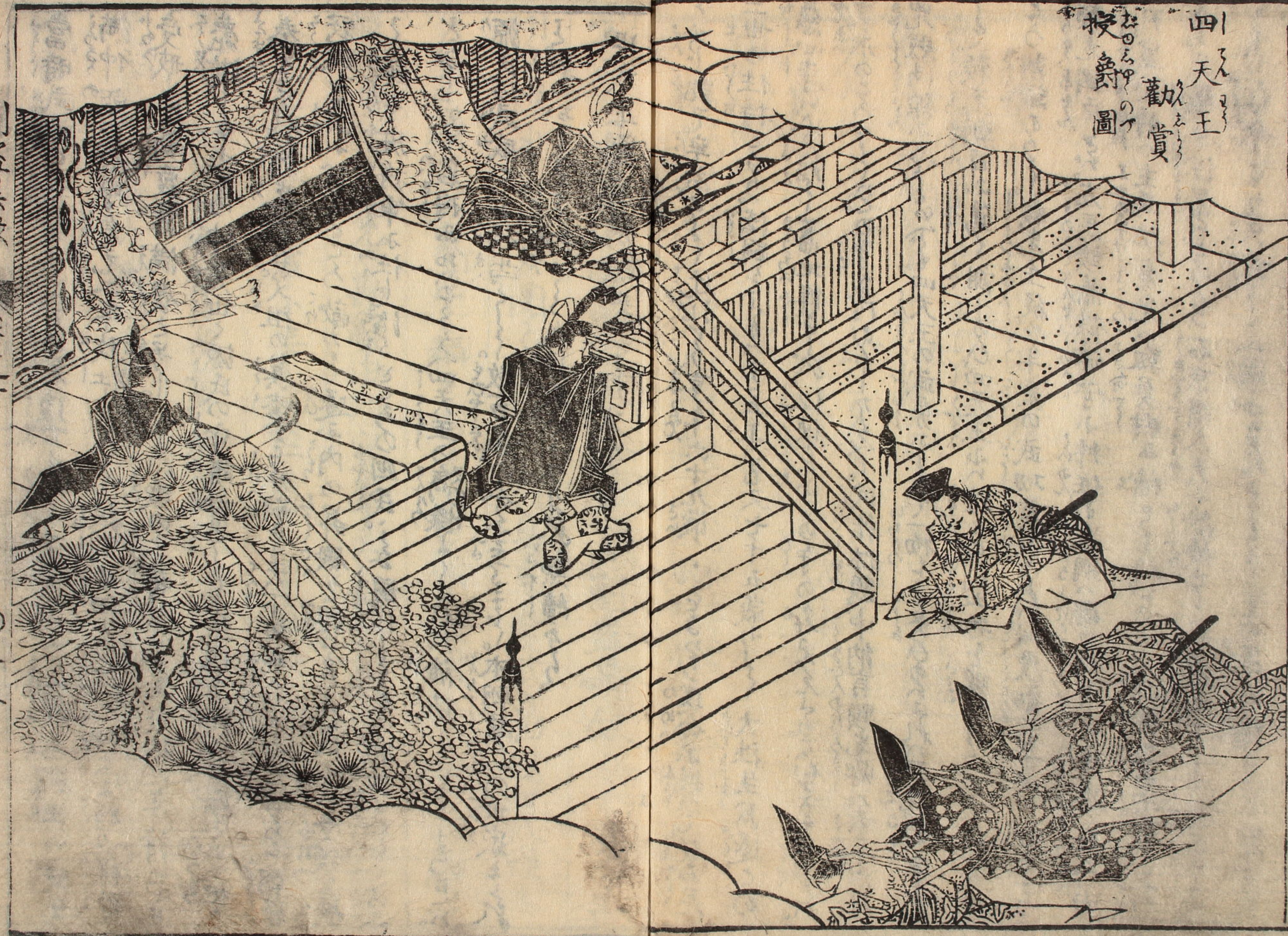


消息公進。せきくのりまことりて。それもうまひゆきとくうけり。時別  
おもろりめしん。このいふせんと志ざりき。ゆき折しも。性空と人を二人乃  
従弟公將。この寺にありのふ。式部性空と見たり。ゆき彼短冊公  
押せり。その方へ指し。と人とも公見のふ。

くつたより。聞き。みまご入りぬ。べらうめて。せ山の塔乃。所  
性空三度吟。くくうら。貧道と。のふあせとのひ。ゆき。式部公付ひ。つ。  
画公尼の端座合掌。し。礼盤の前不到。の。画佛尼細。や。小眼。公。み。た。え。  
と人公。又。式部公。眼と。と人高。や。小四句の偈。公。み。た。え。  
貧而亦賤。閑亭大。以之為樂。不羨富貴。  
時小画佛尼。又四句を續く。ゆき。  
我不知人。無恨無喜。人不知我。無善無毀。

吟。訖。卒然。く。遷化。せり。享年六十九歳。ゆき。送命。公。従。ひ。て。説石尼  
二世の住持。あり。法嗣。と。り。つ。と。五年。是。又。七十五歳。ゆき。大往生。公。遂。この  
慈心寺。へ。今。猶。舊地。詳。す。但。挾衣。公。この寺の。名。を。え。り。ゆき。考。す。ゆき。  
文永のころ。ゆき。この寺。を。め。の。り。か。る。ゆき。同話。休題。中。納言。頭。光。卿。公。去。年。六月。  
光。賊。は。館。公。ゆき。この。ゆき。四天王の。武勇。公。ゆき。一物。を。も。失。ひ。の。ゆき。感。悦。斜。る。ゆき。  
ゆき。頼光朝臣。公。ゆき。謝。の。ゆき。四天王。ゆき。種。の。ゆき。出。物。を。賜。の。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。  
ゆき。朝議。あり。ゆき。頼光主。従。ゆき。年来の。武功。莫。大。ゆき。此。度。勸。賞。あり。ゆき。ゆき。ゆき。  
頼光朝臣。公。左馬頭。兼。横。津。守。小。拜。任。あり。綱。の。溜。口。内。舍。人。季。武。公。勤。解。由。  
判官。公。時。へ。主。馬。佑。貞。光。公。鞞。負。尉。公。補。せ。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。庄園。教。箇。所。を。死。行。  
ゆき。又。藤原。保。昌。公。ゆき。石京。權。太。夫。公。除。授。せ。ゆき。長。壽。ゆき。長。元。の。ころ。  
ゆき。存。命。せ。り。只。惜。ゆき。公。嗣。子。公。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。家。終。ゆき。ゆき。ゆき。

四天王  
勸賞  
授爵圖



別名異鏡

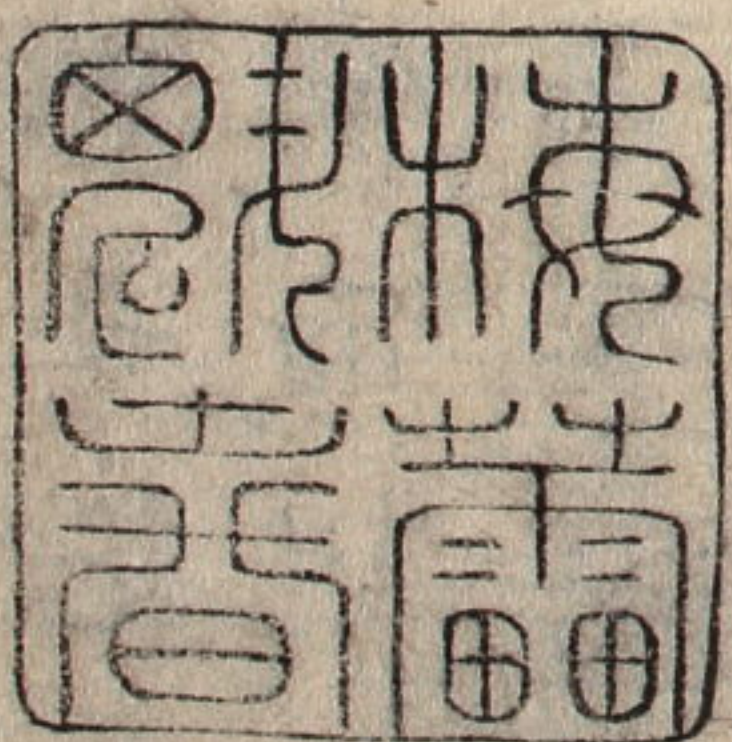
當時武略の達人とす。その名後世に赫くあり。その子頼光朝臣の嚴父  
満仲朝臣の心。貞元二年致仕せらる。播磨多田より江州仰木に移り祝髪  
受戒して新發意満慶と号す。八十六歳の上壽歿せらる。長徳三年八月廿七日  
薨逝す。その神異世々源氏の守護神とす。正一位多田の玉太廟と崇祀り  
奉る。され頼光朝臣又祖の眞衰を承嗣く天下の英名を喪ひのりて朝敵  
寇賊を討ふじふとて。敵なく。遂に内位の昇殿を聽こす。九箇國の受領を歴  
す。鎮守府將軍に任じ。治むところの國民。その風化す。その徳に慕はる。その  
とみ。かろ名將みおのり。四天王の雋傑とす。これ公補佐とす。まじは  
源氏の武威とす。掲焉とす。数百歳の今ふ至るまじ。本朝第一の世家とす。此  
と。孰かおそむとて仰さる。目出とす。りりこれ勲績なり。

四天王剽盜異録卷之十大尾

客あり一日著作堂に請來つ。坐右に剽盜異録ありを見ふ。  
開く僅ふその目か開く曰。綱公時。貞光。季武の四傑世人悞て  
これを頼光の家臣と稱とす。つとて。綱公時。貞光。季武の四傑世人悞て  
職主馬佐。貞光の勘解由判官。季武の鞆負尉とす。頼光朝臣  
の職官鎮守將軍に畢る。鎮守府の軍監あるの。勘解由は  
判官との。司馬佐との。兵衛衛門の四府に尉との。舎人の便  
是寮より。その賊ありて異ありて。彼朝臣の家臣よありて。又  
明は。ありて。四傑。當時勇敢掲焉とす。公。勅とす。

頼光朝臣さるる。劇賊を討つゝ免ふのこゝ主人嘗尚古の癖  
 のり。今その傳を記と申出置。談何ぞさる及ぶかといふ。  
 主翁いふを聞く。茫然とさる。應ぐ曰。予も此の言を  
 かりざるふらうと。さるあ終ど。今やさる古に説ん少と。  
 いふを頼光の家臣といふ人も又不可とせど。故いふとあるは。  
 往サキ小釋官軍記を作らる。まらり。頼光朝臣の武功を  
 世ふら。さめんを因り。綱季武をのり。と此臣とさる。そのへ  
 その徳彼朝臣子及ぶ。示さん為り。原是作者の  
 懲意あり。且軍國の大事を記と。傳者の錯誤なれ。とを  
 得ど。況小説の事。鬼名小托。勸懲の根。か。稚蒙  
 を誘ふの也。但その文の巧拙。論道。その言の虚實。考ふ足らる。  
 あら。客感然と。遠巡と。時マツカレ小僕。側み待。主客の  
 論議を感激。漫小數行を算と。古言と。さる。

魁藩外史譚



東洋異録

卷之十

十三

飯台曲亭翁嘗所著之稗史文思奇絕義  
理深妙乃擇畫者而圖之擇削刷而刻之  
繡梓既成使門人校之蓋曲亭翁車姓漚  
澤名解字頊吉別號著作堂亦稱篔簹隱  
居世人呼為馬琴子本房每歲得其所著  
以雕刊此編最平致可謂耐菴施氏之遺  
響也冀披閱者勿捲腦勿折角勿以爪侵  
字勿以唾揭幅勿以作枕勿以夾刺隨損  
隨從隨開隨掩古人觀書槩如此因書于  
篇後以為記

和漢  
西洋  
書籍賣捌處

群玉堂河內屋  
岡田茂兵衛

八



